

大阪日々新聞紙

第九二二号

静岡縣下我入道村多漁師後藤文五郎か子

徳藏八明治八年十一月才あつた或夜網を引んとて今入の若者と西人船小

のり込んて聞の世よりさうさうな夜不沖へあは出りて

一番場を取らんとてあは 浮空麻のかりまかりを

呼声ふと目を覚めしゆらとを見をまはりの海

く大海の荒浪逆また動揺せりまをとも西人船を

あはとてかひて聞へ 罰をの若者力のかさう押

久は逆浪おる徳藏は 樽をゆをまてち

折るまを樽ツタを 腕の腕を突あうあ

樽をさへみまをわ 切を

まをの船 樽をさうあ徳

まはれ誤つて 腹をさうさ

あつたふと云ふお近う見ふ

腸三尺をうりわ出し 各連れさう西の治癒

然る近顔色をさう腸が 各お苦痛を見せに実

剛気の 壯者ありと報知云百三十三号 記せり

因に云樽ツタをふたりあや指をさへさうを誤

怪我ありと古より云つてふらと船のふらと

あつたふと云ふお近う見ふ



信敬二
身入修聖

修上
区内士

あり

